

2025 2T 外国人児童・生徒の教育課程デザイン論 シラバス

授業担当者 南浦 涼介

1 授業の目的

1. 言語的文化的に多様な子どもたちの存在をふまえ、その教育課題や可能性を理論的に捉えることができる。特に今回はそれを「生態学的なカリキュラム」の視点から捉えることができる。
2. 海外文献・国内文献をふまえながらその視点を具体的なケースや事例と結びつけて理解できる

2 授業展開（展開の詳細は「4」を参照してください）

1	6/6	外国人児童生徒教育の現状と課題
2	6/6	外国人児童生徒教育の現状と課題
3	6/13	外国人児童生徒教育のアプローチと議論
4	6/13	外国人児童生徒教育のアプローチと議論
5	6/20	外国人児童生徒教育のアプローチの省察
6	6/20	工学的アプローチと生態学的アプローチ
7	6/27	(reading week)
8	7/4	生態学的カリキュラム論 1 () ()
9	7/4	生態学的カリキュラム論 2 () ()
10	7/11	生態学的カリキュラム論 3 () ()
11	7/11	生態学的カリキュラム論 4 () ()
12	7/25	生態学的カリキュラム論 5 () ()
13	7/25	生態学的カリキュラム論 6 () ()
14	8/1	生態学的カリキュラム論 7 () ()
15	8/1	生態学的カリキュラム論 8 () () およびまとめ

3 評価

1. 省察およびリーディング・メモ 25%
(フォームで入力: 500 字前後×8 回: 全体で内容は共有。展開 4 以降は各論文に言及)
2. 文献発表 25%
発表後、スライドは修正して提出 (ウェブサイトで引用禁止の上閲覧可能に)
3. 授業内の議論への参加 25%
4. 期末課題 25%
2 の発表スライドを修正, 社会的媒体としての視点, 全体の接点として加筆・修正して提出 (ウェブサイトで引用禁止の上公開する)

4 展開の詳細

展開1 外国人児童生徒の現状と課題を知る（1～2回，3～4回）

6月6日（金）第1回・第2回 文部科学省の研修動画を視聴し，議論する

6月13日（金）第3回・第4回 東広島市教育委員会の研修に参加し，実際を知る

- 対面かオンライン参加を選んで受講します。（対面の人 5名程度まで）

13:15 東広島市立三ツ城小学校

13:30-16:30 研修を日本語指導や校長先生と一緒に受ける（研修担当 南浦）

- 学校全体で多文化・多言語の子どもたちを包摂するときに必要な4つのアプローチ
- 設計的工学的な発想と，生態学的な発想の違い
- 実際の小学校の日本語指導や在籍学級の指導から検討する

（オンラインで受ける人）

12:50 LI07で集合 全員で研修を見る

13:30-16:05 研修を見る。LI07で内容について感想を出しながら検討しあう。

展開2 工学的アプローチと生態学的アプローチ（第5回）

- 6月20日（金）第4回 6月13日の内容の共有
- 6月20日（金）第5回 生態学的アプローチの概要

展開3 Handbook of Curriculum Theory, Research, and Practice の講読

Trifonas, P. P. and Jagger, P. (2024). Handbook of Curriculum Theory, Research, and Practice, Springer. を読む（課題文献は p.3）

講読の観点① 「生態学的なカリキュラム」とはどのような発想か？

講読の観点② 生態学的なカリキュラムはマイノリティの包摂という観点をどのように行うことが可能か？

講読の観点③ 生態学的なカリキュラムは日本の多文化・多言語の子どもたちの包摂の教育をどのように実現しうるか？

4 スピンオフ

内容の展開によっては，スピンオフ活動で任意で後期に授業内容をまとめ，学会発表や論文化をすることも視野に入れます。

5 「展開3」の課題文献

Trifonas, P. P. and Jagger, P. (2024). *Handbook of Curriculum Theory, Research, and Practice*, Springer.

- https://link.springer.com/rwe/10.1007/978-3-031-21155-3_44 (Springer へのリンク)

① Kenneally, N. (2024). *Child's Play: Play as an Informal, Relational Curriculum of Childhood*.

- この章では、幼児期の非公式なカリキュラムとしての遊びを探求し、それが子どもたちが関わり、子どもになり、子どもになる方法を学ぶ社会的実践であることを提案する。この章では、社会学的観点から、遊びが子どもの社会化の重要な側面であること、すなわち受動的なプロセスから能動的な関与へと再構成された概念を探る。遊びは、子どもと大人を区別する社会的力学として、また、子どもたちが子ども時代の社会的立場に生きることを学ぶ過程として枠組み化されている。
- ブルデューの実践とハビトウスの考えに触発され、子どもと親の子ども時代の視点を探る著者が行った研究を参考にして、本章では、子どもたちが子ども時代の社会的カテゴリーの行動と境界を身につけ、その範囲内で実験や即興をする社会的学習の一形態である、身体化された、非合理的で、非公式で、関係性のある実践としての遊びを理解することを主張する。インフォーマルな学習としての遊び、対話としての遊び、子どもたちが積極的に社会化に参加するための手段としての遊びの考え方も探求されている。

② Arvanitis, E. (2024). *Towards a Transformative and Reflexive Curriculum*.

- 多様性に配慮したカリキュラムの開発は、学習者の変革的な学習と主体性を高めることを目指す包括的な質の高い教育にとって、依然として最大の課題である。多様性を尊重する高度に差別化されたカリキュラムは、意味のある知識の生産プロセスを基盤とし、困難なグローバル課題に取り組み、応答的な学習を支援し、異文化間成長マインドセットの育成を目的としている。学習者は、包括的で変革的な学習環境で活動する際、多様な能力と応答的な創造性を備えた創造者となり、社会正義への明確なコミットメントを持つ応答的な市民となることができる。したがって、倫理的な起業家精神とグローバル市民としてのスキルを習得することは、カリキュラムの差別化（例：内容、教育プロセス、学習成果物、学習環境の改変）における重要な目標である。
- この章では、ギリシャの7つの幼児教育施設における差別化されたカリキュラム介入に焦点を当てる。差別化された学習と情報に基づいた意思決定は、現実の条件に高い適応性を示し、新たな意味の構築と体験の道筋を生み出した。段階的な支援を通じて、難民問題、戦争の影響、強制的な人間移動、難民の統合といった複雑なテーマが交渉された。カリキュラムの内容と多模態的な教材は、学術的な学習だけでなく、学習者の生活世界、学習スタイル、興味にも整合している。最後に、参加型の視覚芸術アプローチは、この介入を通じて子どもの積極的な関与を維持する有用な支援手段として証明された。最終的に、公開の視覚芸術展を通じて、子どもたちは公の物語者や擁護者となり、感情を表現し、難民の統合を促進するために応答的な行動を試みることができた。

③ Carisson, M. (2024). *The Twinning of Bildung and Competence in Environmental and Sustainability Education: Nordic Perspectives*.

- この章では、行動能力（AC）概念における「Bildung」（陶冶）と能力の結びつきを考察し、カリキュラムの内容や教授・学習アプローチの正当化において、適切な学習、行動、変化の形態とは何かに関する仮定を明らかにする。また、教育実践を導く際の潜在的な可能性と制約についても検討する。この章は、環境教育と持続可能性教育（ESE）の主要な理論的文献におけるACの概念化、および北欧のESE実践ガイドラインにおけるACの概念の活用を参考にしている。ACを教育的な理想として概念化することは、北欧の教育政策やカリキュラム枠組みにおける「積極的な民主的市民性」の概念とよく一致しており、教育に対する肯定的でないアプローチと変革的なアプローチの両方を指している。
- 一方では、教育は既存の社会や与えられた社会に沿って子どもや若者を形作るものではないことを強調し、他

方では、教育が主体性を変革し変える可能性を強調している。北欧のガイドラインにおけるこの概念の使用は、ACの異なる理解を示しており、概念の初期の記述を、多様な目的追求において異なる形で取り入れられる「教育の手段としてのアイデア」として検証している。その解釈的・文脈的な柔軟性は、教育研究、政策、実践における異なる利益を調和させることを可能にしている。ガイドラインにおけるこの概念の使用は、学校における既存の枠組みや論理に疑問を投げかけることのない学習、行動、変化の形態を指す、適応的アプローチによって組み立てられているとさらに説明することができる。

④ **Teasley, C. (2024). Curricular Convergences and Divergences Around Global Citizenship Education: Between the Universal and the Pluriversal**

- 以下のページでは、ポストコロニアルとデコロニアルの分析を基盤とした批判的な考察を通じて、21世紀初頭において、グローバル・シチズンシップ教育が横断的なカリキュラムプロジェクトとして台頭し、新自由主義下でますます分断化が進むカリキュラムへの挑戦として浮上した理由と経緯を考察する。
- それは、共有された権利と責任の感覚、他者への尊重と連帯、この地球上の相互接続性を育むために設計された既存のカリキュラム領域を、どの程度統合または包含する可能性があるのか？ グローバル・シチズンシップ教育が実際に何から成るのかについて、合意はあるのか？ その可能性と潜在的な落とし穴は何なのか？ 認識論的レベルでは、どのような知識を生み出し、どのような知識を抑制する可能性があるのか？ 例えば、国連によって保護される「人民の集団的自己決定権」と「帝国主義的・（新）植民地主義的勢力からの解放」は、グローバル・シチズンシップのコスモポリタンな枠組みにおいてどこに位置付けられるのか？ グローバル・シチズンシップ教育の存在論的含意は何なのか？
- そして最後に、この教育研究および実践のフィールドは、これらの用語の最も広範で歴史的に位置付けられた理解において、異文化間の社会正義、相互関係、相互依存的な共存を維持する生き方を生み出す可能性を秘めているのか？

⑤ **Carper, P. and Jagger, S. (2024). Curricular Readings, Conversational Writings: Dialogue on a Book Club**

- カリキュラムという言葉を使うとき、私たちはしばしば、規定されたカリキュラムを想像する。しかし、より広く、語源的にカリキュラムを見つめると、学習内容や文脈の可能性の広さが浮かび上がってくる。カリキュラムとは、走る、コース、キャリアを意味し、currere（走る）という動詞に由来する。この行動は、おそらくすべての教育者が何らかの形で感じたことがあるだろう。レースを一時停止し、カリキュラムとcurrereに少し長く留まることで、ピナーがcurrereを単にコースの目標やレースの指標ではなく、自身の教育経験や人生経験を振り返り、再構築する自己反省的なプロセスとして捉えた点を瞑想することができる。
- 回帰、進展、分析、統合のステップを通じて、学習者は過去を省察し、未来に目を向け、現在生きている経験を祝いながら、教育的な瞬間と教育と学習の独自の機会を捉える。このプロセスこそが、私たちの小さなながらも情熱的な読書会が、2020年春から2021年夏までの1年間、個人的な経験、社会の変化、パンデミックに関連する緊張を反映したテキストを読み、応答する中で、最初は無意識に実践していたものだった。この章では、ブッククラブの2人のメンバーのカリキュラムに基づく読書と対話的な執筆を通じて、読んだ8冊の本を振り返り、アイデンティティと聴き合い、強さ、喪失、可能性に関する対話が展開された内容を共有する。

⑥ **Kirchgasler, C. (2024). The Orders of Order: Curriculum Design and a Hauntology of Efficiency**

- カリキュラム設計は、一般的に、良い人生の基盤となる体系的な学習課程を構築するための原則と手順として理解されている。しかし、ここでいう「人生」とは何なのか？ そして、カリキュラムはそれを設計する際に何を前提としているのか？ デリダの「ハウントロジー」の思想に依拠し、本章はカリキュラムを「幽霊の出家」として捉え、20世紀初頭からその設計原則の変遷に組み込まれてきた前提を検証する。進化発達主義、サイバネティックプロセス、予知アルゴリズムとの偶然的な関係を通じて、この章は、カリキュラムが「人生

を効率的に設計する」という原則に幽霊のように付きまといられていることを考察する。これらの原則は、これらの目標を脅かす存在やものを制御する必要性に対する希望と恐怖を体現している。

- これらの設計原則は、隠れた発達可能性を引き出し、精神プロセスを改善し、環境の変動を予知する実践に内在するものとして分析される。これらの原則は、差異と排除を生む仕組みとして分析される。これらの設計原則は、子どもの先天的な特性を育成し、ランク付けし、比較し、「能力が低い」と見なされる者を分離する正当化を行う；行動の継続的な監視、評価、フィードバックのプロセスを体系化する；リスクに先んじて行動するデータ駆動型システムを構築する。これらを総合すると、カリキュラム設計原則は「秩序の秩序」である。カリキュラム設計を「how-to」ではなく、生命そのものの規範と価値に「憑依された」ものとして捉えることで、この章は読者に、実は設計によるものなのに、一見自然に見える差異と排除について、異なる視点で考えるよう促している。

⑦ **Ouellette, M. A. and Gavin, D. (2024). A Flat (Packed) Affect: Theorizing Pedagogies of Seriality in Unboxing and Assembly.**

- この章では、ユーザーの役割が、ビルディングブロックや組み立て式家具、食事キットのようなものを組み立てる人へと変化する点について考察する。これは、技術が人間の経験のパターンと規模を変化させることで新たな役割をどの程度創造するかを評価する機会を提供するだけでなく、潜在的な教育効果を検討する入り口ともなる。ますます重要な新たな役割の一つは、ものを組み立てることであり、その方法は、メディアのアルゴリズム的な内容に一致した（非常に）厳格で反復的なものであり、しばしば組み立てラインに似ている。
- 実際、本論文が示すように、このポスト・フォード主義の形態では、工場は私たちの自宅、教室、そして手のひらの中に存在している。これらの効果は、デジタル環境が育むシリアル性によってさらに強化され、知識を反復的な行動のセットを通じて組み立てることで、学習に新たな可能性が生まれる。ただし、結果として生じる効果は、プロセスに先立ち条件付ける、結果に偶然的な同一性を強いることから生じる。したがって、私たちの技術の大部分に依存する組み立て実践に文字通り組み込まれたシリアル性の教育効果を検討することが必要となる。

⑧ **Khan, S. and VanWynsberghe, R. (2024). Identifying Children's Funds of Knowledge as a Bridge to STEM**

- この研究は、「低い資産」と見なされがちなコミュニティの小学生の知識の資産と、コミュニティベースのカリキュラムがこれらの知識の資産に与える影響を調査した。知識の資産とは、家庭や個人の機能や福祉のために、歴史的に蓄積され、文化的に発展してきた知識とスキルの体系を指す（González et al., 2005）。知識の資産は、家庭や教室での実践を理論化する。STEM知識の資産とは、コミュニティの実践や家庭活動から得た、体系化されたSTEM学習成果に関連する社会的・知的資源を指す。子どもの家庭におけるSTEM知識の資産を明らかにするため、家庭訪問、親と子どものアンケート、広範なコミュニティ相談を実施した。このデータは、このコミュニティのメンバーと研究者による共同コーディングプロセスで分析された。これらのコードを基に、45人を超える子どもを対象に、家庭での子どものSTEM知識の蓄積カリキュラムの授業計画に組み込むことを目的としたSTEM知識の蓄積カリキュラムが共同開発された。子どもアンケート、保護者アンケート、教師の振り返りを分析し、このカリキュラムが子どものSTEM学習に与える影響を評価した。
- 定量的データと定性的データの分析結果から、(1) 幼少期の子供のSTEM知識は、家庭と地域社会に基づく方法を用いて特定できること、(2) この地域社会の幼少期の子供のSTEM知識には、構築（絵画、デザイン）、技術（コンピュータや電子機器の使用、グラフィカルユーザーインターフェースの理解）、植物（植物の解剖学と生物学、園芸）、環境科学（持続可能性の概念、汚染、人間が環境に与える影響、リサイクル、堆肥化）が含まれており、(3) 幼児の知識の蓄積に基づいて設計された小学校のカリキュラムは、家庭で既に持っているSTEM知識と新しいSTEM知識を統合する強力な手段となり得る、ことが明らかになった。本研究は、STEM分野における知識の蓄積カリキュラムの事例を概念化し、混合手法を用いてカリキュラムの潜在的な影響を評価することにより、カリキュラムの研究に貢献することを目的としている。